

メ ガ ロ ン 考

村 田 數 之 亮

- 一 メガロンの問題性と對處の方法
- 二 ウル・メガロン(テッサリアとヘラディック文化圏)
- 三 メガロンの成立(トロヤ文化圏)
- 四 メガロンの完備と流布(ミケーネ文化圏)
- 五 メガロンの性格と系譜
- 六 メガロンとギリシア

一

メガロンとは廣間であり、邸宅であるが、また特殊な住居建築をも意味してゐる。この語は既にホメロスの詩の内にも出てくるが、それが具體的な特定の建築乃至建築様式を指すに至つたのは、ギリシア世界における、主

メガロン考

としてエーゲ文明圏における發掘の結果であり、従つて近來のことであるといへる。トロヤ、ミケーネ、ティリスを初めテッサリアや中部ギリシアやキクラデス諸島にある錯雜せる遺構の内にあつて、このメガロン型式のプランは截然と明確な完結せる姿を示し、而かも城塞や宮殿内の中核をなす最も顯著な建築物であつた。これはエーゲ文明の最も代表的な建築の一である。

そしてこのメガロンこそはギリシア建築の精髓たる神殿の核室であつて、メガロンをば柱列をもつて繞らしたものが、ギリシア神殿に外ならない。ここにメガロンはエーゲ文明とギリシア文明とを通じての代表的な建築型

式であるので、メガロンに就いては多くの問題が提出され、それらはこの兩文明に關係するものとなる。換言すれば、この兩文明に相關する多くの問題が、メガロンを對照として展開されるのである。即ちメガロンがエーゲ文明とギリシア文明とを通じて廣く支配的であるならば、兩文明の關係如何、またそれが、かく前ギリシア時代に既に成立してゐるならば、この建築型式はギリシア人の出現の時期と方向とを如何に示すか、従つてギリシア人とは何であるか、など凡て前ギリシア的或は原ギリシア的な根源的な問題にかかはるのである。ここにメガロン論の焦點は如上の根源的問題との關聯において、メガロンの起源、その原型の探究に置かれるが、またそれと共に生成完成の姿においてメガロンの性格を規定せんとするにもある。尤も起源や原型が捕握されれば、それは自らメガロンの性格をも多分に左右するものであるから、この二焦點は二であると共に一であり、また一であると共に二である。

勿論、既に幾多の解答が與へられてゐる。先づメガロ

ンの起源や原型について大略三つの立場がある。その内二つはギリシア以外の地にそれを求めんとするものであつて、一つは南方のクレタ建築、他は中歐乃至北歐の北方建築が問題とされる。前者の場合にはクレタ宮殿とミケーネ式宮殿との餘りなる相異が、他の文物における兩文化の性格の差が着眼されてくるにつれて、根本的であるかに考へられてくる。後者の場合にあつては今日までの處にてはバルカンや中歐における材料の不足故に北歐建築との直接關係を確立するために必要な中間體が不足薄弱である。

依つて第三の立場として、ギリシア以外の地における原初型の探求を暫く置いて——結局においては南方或は北方建築との近縁が定められるが——今日ギリシア世界内に現存する原初的の家屋の跡より出發してメガロンの生成を辿らんとするものである。然しこの場合には先史ギリシアまたエーゲ世界が文化的な統一體をなしてゐたとの前提の下に初めて許さるべきことであるが、ミケーネ時代以前、即ちメガロンの生成期には他の文物が示す如

くにかかることはないから、論理的には容易であつても、事實上には疑點を存する。即ちその發展段階が極めてよく辿られてゐても、それは地方差、文化圏の差を無視或は輕視する傾向に陥り易い。

然らばエーゲ世界、前ギリシア時代の産物としてのメガロン論は如何なる立場方針の下に進めらるべきか。私は、先づ各文化圏内におけるメガロンの生成と性格とを究め、而して後相互文化圏の關係を考量しつつメガロン一般の系譜や性格に至るべきである、と思ふものである。一體前ギリシア時代の時間的また空間的に異なる文化圏としては、テッサリア、南ギリシア、トロヤ、キクラデス、クレタ、ミケーネであることは何人も認めねばならない。尤も、此等の間には共通性もありまた關係もあり、他の近接文化圏の影響も無視し得ない。然し先づ此等の文化圏は如何なるメガロンを達成してゐるか。此處より本論稿は進めねばならない。

二 ウル・メガロン(テッサリア)

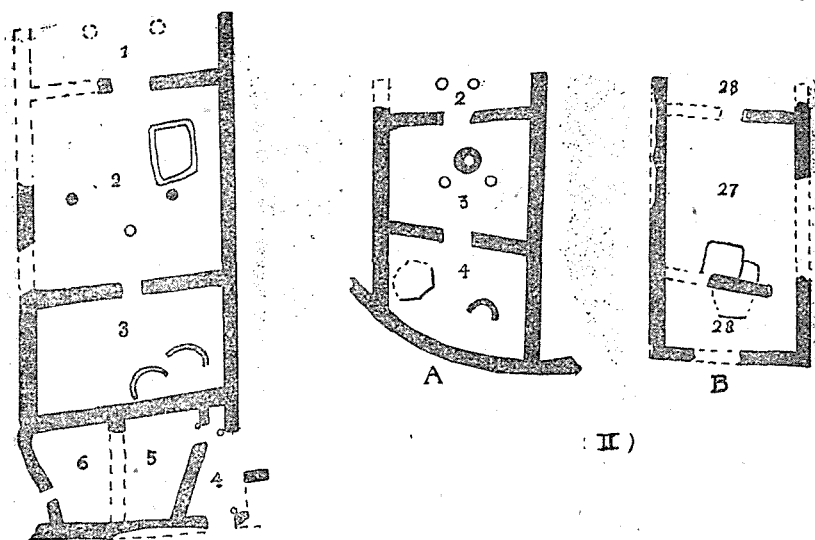
テッサリアは特殊な封鎖的文化圏を久しく保持してゐたが、各地に最も原始的なメガロンが発見された。而かも此等のウル・メガロン型以外の原初的な家屋址も各地に發掘されたがために、メガロンの發生について最も豊富な系統的な材料を提供した。主なるウル・メガロンとしてはセスクロ *Seskro*、ディミニ *Dimini*、A及びB、其他亞メガロンともいふべきもの(セスクロ小メガロン及び7、8、9、ラクマニ *Rakmani*、P及びQ、リアノクラディ *Lianokladi*)、また正方形や楕圓形や馬蹄形の家屋があつた。此等の原始的な家屋は一體どのやうな特質を示し、また如何にして成立してゐるか。

テッサリアの諸家屋は保温を主として、そのために多くは南方を向きの、何れも固定せる爐が家屋の中心をなしてゐる。爐はもとより調理用にも必要であるが、それが固定せる時、暖を採ることが家屋の目的となり、家屋全體の構造構成もこの目的の制約の下にある。先づ爐のある居室の戸口が直接外界に向つて開かれてゐる場合には、外氣の侵入と暖氣の流出とをなるべく避けるこ

とが望ましく、ここにセスクロの「小メガロン」は入口を建物の正面の中央ではなくして、その隅によせて設けた(Wace-Thompson, *Prehistoric Thessaly* 65)。

しかし入口が片隅にあることに不満であるならば、他の設備の下に中央に開かれることができる。セスクロとダイミニのメガロンまた其他に於けるが如くに、側壁を張出してポーチとなし、以て入口を保護して風雨の侵入を防いだのである。このポーチはあるひは北歐の丸太小舎 log cabin にては自然的に原初より發生するものであるかも知れないが (Boehus, *Mycenaean Megaron and Nordic House*. B. S. A. XXV. 1826.)、これとの聯

絡はしばらく措くとしてもテッサリアにても甚だ早くより存在して、既にテッサリア第一期なるセスクロ第一期の建物より「恐らく」あつたであらう (Wace-Thompson *ibid.* 65.) テッサリア第二期には前の例の如くに一般化してゐる。このポーチはセスクロやダイミニAのメガロンの如くに通例屋根を有したか、或は此等は例外なりしかは不明であるが、何れにしろ、ポーチの設定は家



(I)

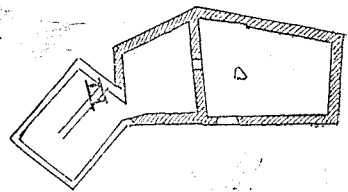
(II)

(I) セスクロ

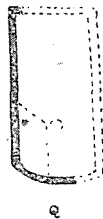
(II) ダイミニ

屋への入口が正面中央にあることを決定的にしたと考へられる。

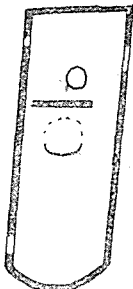
しかしポーチを設けても、爐が入口の中央線上にあれば、出入毎に室内の暖氣が、逃げ易い。ここに爐はセスクロ、ラクマニQ、デイミニAの如くに居室の片隅に寄るか、或はデイミニBの如くに中央線上にあつても後壁に附着する。この場合獨立せる爐は壁に密着せる爐より進化するとの説が、デイミニなどの例よりして推測され得るが如くであるが、それは否である。蓋し、原型家屋の一たる圓形單室家屋にては當然當初よりして爐はその中央に壁から離れてある筈であるから。またこの爐はセスクロやデイミニA・Bの如くに一室に一つ以上、また後室にも設けられる場合もあるが、このことは爐に暖を採るためのものと調理用のものとあつた證であらう。即ち爐は純然たる實用であつて、不規則な圓形或は多角形にして一定の型も持たず、またその位置も數も定式化してゐないのである。因に、爐は常に床より高く築き上げられたものである。



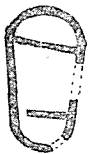
(V) リアクラデ



(IV) ラクマニ



P



(II) リニ

次に此等のウル

・メガロンは主室たる居室の背後に小なる後室を持つが、此處への戸口も保温上から隅に開かれてゐることとは、ラクマニP・デイミニB、リニP.E.の如くむしろ一般である。後世の完成せるメガロンにては小なる副室が大なる主室の前にあるのであるが、テッサリアにては何故にかかる例がないか。

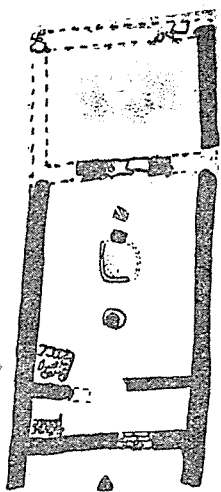
後室は物置であつたり或は寢室であるならば^⑧、その部屋は當然家屋の奥に占むべきであると思はれるのである。

以上、テッサリアのウル・メガロンはポーチを加へることによつて入口を中央に規定し、大なる居室に主なる爐を設けた。しかし此處に注意すべきことは、此等のウル・メガロンは決して通常の民家の型ではなく、卓越せる建物であつたことである。このことはセスクロヤディミニの遺蹟圖をみれば、一見明かである。メガロンは一般民家乃至附屬的な建物より形においてより整然とし、大さにおいても目立つのである。そして壁を他の建物と共にせず、孤立して完結體たらんとしてゐる。このことはメガロンは常人ならぬ勢力家權勢家の住居であつたことを物語る。この孤立はメガロンの特色の一であつて、それは保温のためではなく(Mackenzie, ibid.)、この卓出せる人の住居たりし故だと私は解するのである。

しかし久しく、石器時代に止つてゐた——テッサリア第一期より第三期に至る——テッサリアにては權勢家と

雖も、例へ城壁を固めてゐても、未だ左程民衆と別種な生活に入つてゐない。故に一個の家屋にて生活が足りたから物置をその内に持ち、公私の生活は未だ分れてない。材料は民家と同様に小石、泥、粗なる日乾煉瓦、木材であつて、形も整齊といへない。或は彎曲せる壁面があり^⑨、或は歪める四面體などであつて、メガロンの定形化への動搖期をみるができるのである。故に凡てのメガロンの要素は既に發芽しつつあるが、未だ將來の華を豫感せしめるに止つてゐる。

オトリス山脈が南方海上より滲透するクレタ文化に對



(V) コラクウ

する防波堤をなして、テッサリア文化とヘラディック文化との別を生ぜしめたのであるが、この南方ギリシアにも矢張りメガロン型を残してゐる。もとより乏しいもの

ではあるが、中部ギリシアのエウトレスス Eutresis とペロポネソス半島のコリントに近いコラクウ Korakou におけるそれである。そして大體においてテッサリアのウル・メガロンに近く、ポーチをそなへ、建物の正面と奥行の比は後のトロヤ系の如くに大でない。そして特に注目されるものはコラクウの上にして、既に小なる前室を設け、大なる爐が主室の中央にある。そして恐らく物置として與室を有する。此處の後陣ある家屋にもみる如くに、テッサリアと異つて前室が定立せんとする前夜にあるものであらう。かかるウル・メガロンの生成において我々はクレタの影響をみるべきや、或は別な北方人の侵入を認むべきやについては、他の文物との考量において兩者何れでもないといはねばならない。

註① デイミニ及びセスクロにては南或は西南に入口があり、西風の強いリアノクラダイにては東向き (Wace-Thompson, 190) であり、他の家にては Tsangli, L. P. R. 1 何れも南向きである。但しラクマニP・Q共夏は涼しきも冬寒き東北向き。リアノクラダイの家の人口については西南隅とする説もあるが、(Fimmen, 46) 私はウエイヌ等の説に賛成

メガロン考

する。

- ② この例が普通なるは次節のテルミ。
- ③ セスクロの小メガロン、リアノクラダイの家も「恐らく」ポーチありしならんと (W-Th. 55; 190)。
- ④ ラクマニPは例外的に爐のある主室が小であり且つ前にある (W-Th. 39)。
- ⑤ このリニの家は卵形プランにしてプラン發展の上の問題となるものであるが、その入口は東側即ち卵形長邊の中央 (Fimmen 42) とするよりは、ウエイヌ等の如く南側即ち最短邊とする (W-Th. 113) を妥當と思ふ。
- ⑥ 稀なる例外はラクマニP、註①参照。また Fimmen (K. M. Kultur, 46) は入口を西南と推定することによつて、リアノクラダイの家に一つの飛躍、發展段階をみてるが (註①参照)、私はそれを採らず。
- ⑦ これ即ち but and ben type である或はそれと似る。(Mackenzie, Cretan Palace, B. S. A. XIV)。
- ⑧ デイミニA、ラクマニP及びQの家屋の後壁が曲線たる故を以て、メガロン乃至矩形プランは圓形プランより進歩せることを示す殘滓なりとする圓形プラン起源論には賛成し得ない。是等は少くともデイミニのメガロンはむしろ城壁との關係より曲線をなしてゐるにすぎないと私は考へる。

三 メガロンの成立(トロヤ)

我々が持つ最初の定立せるメガロンはトロヤ第二市のそれである。第二市時代のトロヤはいふ迄もなくその全盛期であつたが、その文化は西アナトリア(西部小アジア)よりトラキア、マケドニア東部を含むものであり、この地域内においてレスボス島のテルミ Thermi の住居群とトロヤ内城市の中樞部の家とがメガロンに關係する^③。

テルミはトロヤを建てし民族の一派が同時に建てし町であつて、第一より第五市に相重なる家屋址であるが、一定の計畫による都市と思はれ楕比する家並があつた。(Lamb-Wace, B. S. A. XXX; XXXI; W. Lamb, Excavation at Thermi in Lesbos. 12; 16)。第三市 B より新時代が始り第四市は最盛時であるが(Lamb, *ibid.* 31。)その家の形式には大差はない。

このテルミの家屋の特色はテッサリアのウル・メガロン等比べて、遙かに奥行の深い、従つて細長い家であ

り、主室が直接戶外に開かず小なる前室を持つことである。此等はトロヤのメガロンと共通するものである。トロヤとテルミとの年代關係については議論があるが、テルミ第一及第二市はトロヤ第二市より古いと考へられるが故に(Lamb, 212)^④。テルミの家の形式はトロヤのメガロンの影響ではなく、トロヤ系文化の特色と見做さねばならない。然らば何等かトロヤ文化圈に特有な外的影響或は人種の差異が考へられるが、またかく次の如くにも解き得ないであらうか。

一體この主室の前の小室は何のためであらうか。テッサリアの如くに物置乃至寢室は家の奥に設けらるべきである。事實、テルミにては別個の倉庫があり(第一第四第五市「2」「10」の如く)或は主室の奥に物置を持つてゐる(第四市 B・Z 2 の如く)^⑤。かくて前室は他の用のためであり、それは主室の保温と保護とを兼ねし、我々の家の玄関の間、或は次の間の如きものであらう。かやうな玄関の間を有する時にはポーチは必ずしも必要でなく、殆んど凡てのテルミの家はポーチを持たない。漸く第四、

第五市に至つてA₂及びA₃において之を見るのである(Lamb, 48: pl. 6)。前室は正にテッサリアのウル・メガロンのポーチに代るものである。従つて前室と主室と物置との三室或はより以上よりなる家屋は容易に生じ、ここに建物全體の奥行が深くなつて、多くは正面の約三倍四倍である⁴⁹⁾。

ポーチを缺く時、入口は矢張り正面の隅が保温上好ましく、多くは中央にない。爐はその數も位置も不定であるが、むしろ室隅に近く設けられてゐる。

以上のテルミの家屋は凡て民家であつて、此處には卓出せる建築をみることはできない。そして此等は互に壁を共通にして軒を並べて、テッサリアのウル・メガロンの如くに獨立してゐない。しかし乍らその室の配置——前室と主室——や形式の定型化する家よりして——テッサリアと異つて凡ての家屋が同一形式、しかも充分に明確な形式を整へてゐる——その第一市、第二市A₁においてメガロンを認めんとするは(Bittel, Prähis. Forsch. in Kleinasien 27) 聊か早急であらうが、それにポーチ

が附け加はつたものにおいてはメガロンが容易に「起り得る」し、テッサリアのウル・メガロンと眞のメガロンの「中間に位するもの」として認めねばなるまい(Lamb, 49)。

しかしこの中間體はトロヤ第二市において美事な完成體になつて、ここに動きなき堅牢な記念物として出現した⁵⁰⁾。形の整齊と建築技術の進歩と共にポーチが不可缺の部分となり、爐は主室の中央の一つとなつたのである。城市の中央に前庭に面して大なるメガロンを中央にして左にE、右にB・Hの小メガロンが並び建つて、他の錯雜せる「網の目の如き」遺構の中に斷然卓越せる規模と形式とを示してゐた。AとHはポーチと主室とより成るが、Aの主室中央には徑四米の圓形の爐が——床よりの高さ〇・〇七米——設けられ、BとEとは前室を加へて三部より成る。ただに財寶の點のみでなく、建物の上からもシュリーマンが「プリアモス王の宮殿」また「トロヤ最後の王或は領主の館」⁵¹⁾と呼ぶにふさはしい。このトロヤの支配者の權勢こそテルミの民家の型を權威者の

住居の型と定めた最大因であると考へられる。従つてテルミの型を維持しつつ、ただそれを壯重化し、定立したのみである。

爐の位置と敷とがこの目的のために定められ、ポーチはより深く入り、入口は中央に設けられた。故に中心をなすメガロンAが前室を缺くとも保温は保たれ、形は整つてゐる。E・Bは全體においてテルミの民家の如く甚だ細長くして、正面と奥行の比は大體四・五對一であるが、Aは——正面一〇・二〇米奥行約三一米——三對一であり、室數は上述の如くにテルミより少く一乃至二室である。これはメガロンが全く公的な建物となつて、もはや厨房や物置を別棟に持つに至つたからであらう。これと共に主室の比が一定して——Aは一〇・二〇米と二〇米、Bは四・五五と八・九五の如く——二對一を示してゐる。

トロヤ城主の權勢の強大と共にメガロンに課せられたのはその空間擴大の要求である。この解決には他に部屋を建て増すか、或は同型の別棟を建てるかの二法がある

が、トロヤはセスクロの如くに前者を採らずに、後者を選んだ。メガロンの定型化の強さがその型の純一性を固執したからである。そしてこの經過はトロヤ第二市の第一、第二の建築期の動搖と混亂とを経て、第三期において最も美事に達成したのである。即ち最大の而かも正面と奥行の比の最もよきAを中央にして、左右に小にして細長い力弱き相似形のE・Bの兩メガロンを並べた。そしてこれら三つが一つの前庭を前にして、Hは稍と疎外されてゐるのである。

このやうな空間解決法がメガロン定型化の強さによるとするならば、正にこの第三期は城門にてもFM・FO、IICの三プロピライオンが成立してゐるのである。第二市の初期にはただ堅固な極めて厚い一重であつた門が、次第に複門に、即ちプロピライオン式に改造されてゆく次第を知ることができるのである(Dorpfeld, Troia und Ilion S. 11)。私はプロピライオンはクレタの影響とみるよりは、むしろ門のメガロン化と考へるからである。

テルミと異つて新に加へられたものは前庭であつた。

北方系の建築は爐を中心とし、南方系のそれは庭を中心とすとの稍々類型的な説明は別として、トロヤやまたテイルニスにとつて庭は決して涼を採るために必要なのではない。また現在の北獨逸農家にみる如き仕事場としての中庭がメガロンの前庭の萌芽乃至近縁であるとしても (Puhl, *Vorg. u. gr. Bautypen*, 200; Rider, *Gr. House* 31.) 意味においては異つてゐる。トロヤの砂利を敷き固めた前庭は仕事場でも、調練場でもなく、また宗儀場たることを證する遺物もない。それはメガロンの懸絶性を誇示するをもつて當面の目的としたものといはねばならない。プロピライオンより廣き空地を距てて整然たる建築を眺める時、またメガロンより退出の途城壁が圍む堅牢な封鎖世界を感じる時、人はメガロンが特殊な異常人の住居たることを改め感じたであらう。かくて爾來メガロンには前庭は必須のものとなつた。

然しトロヤのメガロンが權勢の表徴となり得たのは、ただそのプランの整齊にのみよるものでなく、その整齊と明確さは建築技術と材料の進化を待つて成就されたの

である。テッサリアの家屋は粗末なる木の骨組に小枝と泥によるものと石塊を粘土にて堅めたものが主であつてセスクロ末期に極めて粗笨な泥煉瓦が使用され (Wace, *Thompson* 64 ff.)、テルミの家屋も木の梁と石塊と粘土と僅かの日乾煉瓦が材料であつた (Lamb, 7 ff.)。然るにトロヤには飛躍的な發展を示してゐる。精巧な木材の梁木と粘土とを以て一定の大きさの日乾煉瓦を張つた壁 (Dörpfeld, 47) は、その厚さにおいて一・四四米或は一・三〇米に達し、而かも清純にして凹凸も歪もないものである。この技術と上張りによつてこそメガロンの形態が定立化し得たのである。それは主に西アジアの煉瓦技術の教示によるものであるから、トロヤ建築は材料的に小アジア系 (Bittel, 114) といはれるし、また正に「煉瓦建築」といへる (Dörpfeld, 30 ff.)。それは石造建築との共通性格をそなへて、清純な外部の線、平滑な輪廓による美觀と洗煉に達し得る。この技術と材料とはトロヤのメガロン完成の重要な一因である。

この材料技法が示す如くにトロヤ文化には西アナトリ

ア的な要素があり、また北方の中歐また南露との關係も考へ得られる^⑧。この兩文化の要素を持ち乍ら特異なるものが、トロヤ殊にトロヤ市の文化であり、トロヤ市は交通の要地としての繁榮と背地の金屬とによつて、突然變異的な文物を残した、コスモポリト的なメトロポリス (Carleton-Thallon, *ibid.*) であつた。トロヤのメガロンはこのアジア的と北方的との富強による權威との産物である。

註① 西部アナトリアには角なる家の跡あれどメガロンとの關係は認められなす (*Bittel, ibid.* 26)。

② テルミの年代にひらて (Lamb, *Thermi* 212) は第四・五市をもトロヤ二市以前に終るとするが、*Bittel* (*ibid.* 27, 33) は稍新しくテルミ二市はトロヤ一市と二市との間と。

③ ビトス殊にビトスのための穴が並列してある (*Lamb, 10*)。

④ Lamb, プランの附圖によると大體の家は間口約三・四米奥行は一三乃至一六米位時にはそれ以上のものあり、細長き室は崩壊し易き壁にてより細分されてゐたらう (*Lamb*)。

⑤ トロヤ第一市にも既に主室とポーチより成るメガロンが新しく發掘されてゐる (*Blegen, A. J. A. XLI. 55f*)。

⑥ 自叙傳、拙譯本九七・一三三頁。メガロン形式の發見は

むしろ彼の協力者アルプフェルトによるが。

⑦ 後のギリシア神殿には後室 *Ostiodomos* を有するものがあるが、それはアテネのバルテノンにみるが如くに、物置であつた。

⑧ *Vace-Thompson, ibid.* 65. 尙ほツンタスによればこれは恐らく父と養子との住居ならんと。

⑨ テイリンスの前庭には大祭壇があつたが、この前庭の意義も祭儀用のみとはいへない。ミケーネの中庭にはその跡はなから、矢張り本文に上述の意義が第一であらう。

⑩ *Bittel, ibid.* 26. 106.; Götzke, *Kultuges. d. alten Orients.* 24 f.; *Carleton-Thallon, Some Balcan and Danubian Connection of Troy. B. S. A. XXXIX.*

四 メガロンの完結と流布 (ミケーネ文化圏)

メガロンはトロヤ第二市において一應定立したと考へられるが、それが完成完結の域に達し、而かも此迄の如くにエーゲ世界内の地方的様式としてではなく、その主要様式となつて廣く流布するに至つたのは、ミケーネ時代においてであつた。

テイリンス城塞の中樞をなすものは第二の中庭 (15.75

×20米)に面して建てられた大メガロンである。この建物は城塞の最高所に位し、最大にして最美、そしてポーチ、前室、主室の三部より成る。またその奥東隣に廻廊を距てて、矢張り鋪装せる自己の中庭を持つ小メガロン、所謂「婦人のメガロン」、更にその東隣には更に小なる第三のメガロン、所謂「小メガロン」が並び建つてゐた。後二者は何れも前室を缺いた副次的なものであつた^①。

ミケーネにおいてはアクロポリスの中心部に、居室や家事室や其他の錯雑せる諸建築群の内にあつて、鋪装せる中庭(15×15米)を挟んで、前室ある「王座室」がその西に、ポーチ、前室、主室を完備した大メガロンが東に相對峙してゐた。然しメガロンが中核であつた^②。

トロヤの諸メガロンは正面と奥行との比は大體において一對三或は四をなす細長いものであつたが——テルミは更に此の比大——、ミケーネ文化圏のメガロンが示すこの比は略々一對二となつてゐる。即ちテイリンスの第一メガロンは12.50×25.50米、第二は略々7.5×14、第三は6×10.5^③、ミケーネのメガロンは11.50×ca.22であ

る。このやうな比はテッサリアのメガロンに近く、またギリシア神殿の内陣の比に似てゐる。かく奥行が減じた結果は、室の配分にも影響して、同様な比が行はれる。即ち主室は略々正方形をなし——テイリンスの第一メガロンは11.80×9.75、第二メガロン5.64×7.60^④、第三メガロン4.98×ca.5、ミケーネの主室は12×13——ポーチと前室とにてまた正方形を二分する。以上の如き全體プランにも、各部の配置にも、また各室にも及んでゐる二對一の比は最も簡明なるものであるが、それが全構造に行渡りて實現してゐる時、有機的な調和を感ぜしめる。勿論このことは決して數學的考量の成果ではないが、何か比例に對する自らなる感覺乃至嗜好が顯現してゐると思はれるのである。

トロヤにては三つのメガロンが共通の開放的な中庭に對して並立してゐたが、テイリンスの三つのメガロンは各自に孤立せる封鎖的な完結世界を形成してゐる。大メガロンも第二メガロンもミケーネのメガロンも柱廊や建物にて外界より絶縁された中庭に對してのみ開かれて、

その己の中庭と共に一つの完結世界を成してゐる。従つてその封鎖的な獨立世界を聯結するものとして廊下が曲折して圍繞するから、それは結合と共に截分してゐることにもなる^⑥。このことはメガロンの卓越性卓絶性の強化であつて、決して一つの神祕世界の形成ではなく、嚴密なる公的性格の限定であるといはねばならない。メガロンは城塞または宮殿の中樞部であつて、最大にして最美の建物であり^⑦、支配者の權威の發揚であり、且つ唯一つに限定されてくる。ティリンスの第二、第三メガロンは副次的或は舊城であるとも考へられてゐる。それ故にティリンスのメガロンの床の嵌石模様はそこに玉座の所在を示してゐる。従つて爐はトロヤのそれと同じく遙かに實用以上のものとなる。ミケーネのメガロンの爐は徑三・七〇米、ティリンスの大メガロンのは三・三〇米であつて、その四周には柱が立ち、我々の爐の概念をはづれる程に巨大であり、壯麗であつた^⑧。かかる爐は決して暖を採る目的のみでなく、公的な、或は祭壇として支配者が使用したとも考へられる^⑨。

次にまたトロヤにて使用されなかつた柱が、此處では重要な意義と作用を及ぼしてゐる。柱は既にテッサリアのメガロンのポーチに往々にして見られたが、今やそれの使用個所と數においてまでも一定したといへる。即ちポーチに二本と主室の爐を繞りて四本と定り、また其他中庭を圍む柱廊とこの中庭の門たるプロピライオンに並ぶこととなる。この柱の使用は勿論構造上の要求に應ずるものでもあつて、ポーチは必ず屋根を持つこととなつて^⑩此面のみがメガロンの眺めらるべき面であるから、殊にこの柱に美觀が要求される。ミケーネ式メガロン正面の柱は、クレタ宮殿の柱を摸して下細であり乍ら、それとは異つて彫刻が施されてゐたと推測される^⑪。

この正面二本の柱は正面の空間を三分することとなりクレタ式の奇數柱による偶數分割、主として一本による二分法と對比して兩建築の根本性格の差の一とされる。こゝとができるが (Nonak, *Homische Paläste*. 33.)、また主室もその室の幅の約三分の一に當る巨大なる圓形の爐によつて三陣に分割されることとなるし、またポーチよ

り前室への入口も三分されてある。

しかし此等の比による美は建築がテッサリアのメガロンの如くに粗雑なる材料より成る時には効果はない。或は鑿により或は鎚による平滑な切石が自由に駆使された時に成功する。角礫岩、石灰石、砂岩、時には雪花石膏が建物の内外部に張り付けられる時、光る面と陰影とが明快な快感を生ずる。ミケーネ時代において初めてギリシア本土がかやうな石工技術を獲得したのであつた。

今日我々はミケーネ式メガロンの種々の想像復原圖を持つてゐる。古くは稍西藏の宮殿の感あるシドヒ(Perrot-Chipiez, His. de Part. VI, fig. 302; Pl. XI.)、切妻にしてギリシア建築に近いシハルトン(J. H. S. VII, 162)、平屋根の簡明なゾルトツヒ Sulze(Karo, Führer d. Thyrns. ab. 6)、切妻にして稍々したギブナー(Andersson-Spier-Dinsmoor, The Architecture of Anc. Greece, Pl. VIII.)など。此等におおつて、また他の論著において最大の相異は屋根が切妻か平屋根かである。此點はトロヤの場合と同様に容易に決定し難い、或は當分は決定し

得ないものと思はれる。

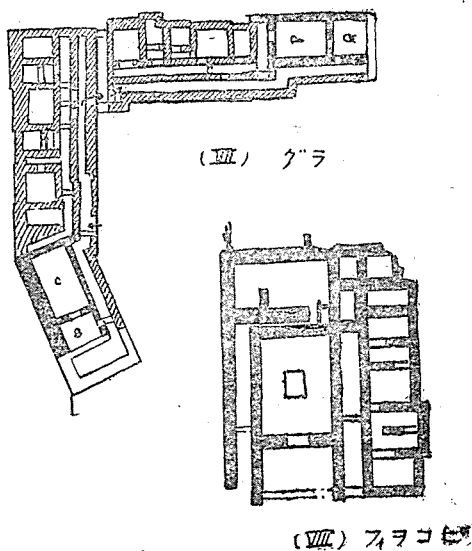
扱つて、メガロンは何故にミケーネ文化圏の中心において完成完結したか。今更ここにミケーネ文化の成立乃至本質に就いて述べるまでもないが、初期ヘラディックと中期ヘラディックとの間に此迄よりもより北方的な民族、より明確にインド・ゲルマン的な民族の侵入によつて起る文明であつて、全くクレタ文明を全面的に受容して成れるものである。従つて他の文物と同様にメガロンにおいてもこの先進文化に負ふ所甚だ大であつて、建築の裝飾はいふ迄もなく石工技術、柱、柱廊はクレタ建築家より學べるものである。勿論ミケーネ人は此等の使用に當つては自己流に消化してゐるけれども、クレタ建築の師なしにはミケーネのメガロンの完成は難かつたといへる。しかもミケーネ人はクレタに代つて全エーゲ世界の主となり、その政治、文化上の支配圏はクレタよりも大であり、もとよりテッサリアやトロヤの支配者の比ではない。この富と權勢とは支配者をして「英雄」としての超人的存在たらしめ、その超絶的權威の顯現としてメガロン

があるのである。さきに述べたテイリンスやミケーネのメガロンの懸絶的な而かも公的な誇示の相貌はここに因するといふべきである。ただその表現において後節に述べる如くにミケーネ的性格を示してゐるけれども。

ミケーネ文明の中心はアルゴリズの王國にあつたけれども、その文明は初めてギリシア本土に文化的統一を齎し、またクレタに代つて小アジア西岸及びキクラデス諸島に弘布した。メガロン様式は此等地方に傳はり、多少變形せるクレタ様式と混在するメガロン建築をみる事ができる。ギリシア本土ポエオティアのグラス Coulas, Gla (アルネ Arne)、メロス島のフィラコピ Phylakopi、トロヤ第六市の宮殿や邸宅が最も顯著なるそれであり、しかも此等は地方性に應じて興味ある變容を示している。

グラスはコバイ湖中の城壁にて嚴重に固めた小島、その東北端の最高所に建てられた宮殿はアルゴスの國と匹敵する中部ギリシアの雄國の城であつた。しかしこの宮殿は中庭を挟んで鐘形に、即ち北翼と東翼とをなしてゐる。

た。その各々の翼は殆んど相似であつて、クレタ流の小室が並列する先端にメガロンがあり、更に監視塔に終つてゐた。このやうな宮殿にあつては一つの中樞部はない



が、兩翼においてはメガロンが最大の部屋であり、最も重要な部屋であつたことは疑ない。何れのメガロンも前室を持つが、それが塔に續くがためにポーチを缺く。主室は略正方形——Bは 5×7 米、Qは 6.3×6.35 ——をな

してゐた。

この宮殿はクレク式とミケーネ式との結合であつて、翼が單位をなすがために、メガロンの孤立化は甚だ無視され、前室への入口は或は右前隅に、東翼にては左奥隅に設けられ、東翼の主室は後壁にさへ入口を持つてゐた。他の小部屋部分はアパートメントと稱されるが、その内側には二重の廊下を通じてミケーネ的である。なほ重要なことは爐と柱、柱廊を缺くことである。クレク式建築とミケーネ式との結合によつて各翼は分節建築として完結してゐるが、尙ほ兩様式は異質的に聯絡してゐるにすぎないといへる。

一體、ベキティアは中部ギリシアの地峽である。故に東方との交渉は繁く、その影響がいま宮殿に現れてゐるのである。そしてコパイ湖の開拓による肥沃な農耕地の富と交易による利とが、このグラスの支配者の富強權勢の因であつた。

グラスよりよりクレタとの深い關係にあるのはキクラデス諸島のメロス島であつた。この島の町フィラコピは

むしろクレタ的な家屋より成るが、その東端部に近い一割或は集合家屋にはメガロンが包括されてゐた。これは卓絶せる権力者の家でなく、またフィラコピの年代については多少の議論があるが、そのメガロンは明かにミケーネ式であつた。全體の正面と奥行の比は大體一對二であり、兩側は廊下によつて他の部分より隔離され、前庭を持つてゐた。そして稍と奥行の深い主室には角なる爐があり、深いポーチも整つて、本土の建築形式の滲透を示してゐた。

トロヤ第六市は所謂ホメロスのトロヤであつて、ミケーネ時代に屬するが、その中心部の建築は残らず、不完全な遺構が散在するに止るが、メガロンVI Aは全くミケーネ的な比を示してゐる。即ち略と正方形の主室(9.10×11.56)、正面と奥行が二對一なるポーチ(9.10×4.25)、全體として壁を含めて一對二(12.30×19.18)である(Darpleid, Troja u. Ilion. 151)。そしてこの第六市はその城壁が最も明白に示してゐる如くに切石技術の進化した時代なのである。

註① Schliemann, *Tiryns*. Karo, Führer durch Tiryns. 第二メ

ガロンはポーチに柱なく、而かもそのポーチ兩側の側壁に各々一個づつ入口を持ち、第三メガロンは更に副次的にしてそのポーチ正面は閉ぢて、左右の側壁に各々入口がある或は古城なり。

② Wace, *Excavations at Mycenae*. Chap. VIII. The Palace. B. S. A. XXV.

③ 何れも外壁を加へてにて第二及び第三メガロンにては外壁の厚さに多少の差異あれば概算とする。

④ テイルンスの第二、第三メガロンは前室を缺くから、ポーチも主室も奥行が稍々深くなる。

⑤ トロヤのメガロン間の狭い間隔は、そこが廊下をなしてゐたともいはれるが (*Dörpfeld, Troja und Ilion*)、他の部分にはなく、全體として廊下の意義は甚だ低い。クレタ宮殿にては同様にして、室と室とは壁にて (*Zwischenwand*) 分たれること多いに反し、テイルンス、ミケーネ、またガラスの諸宮殿にてはこの *Korridorsystem* の發達が特異である (*Noack, Homerische Paläste*. 21. 參照)。

⑥ テイルンスまたミケーネの壁畫を思ふべく、また此處よりアラバスターの腰板が張られ、床は嵌石細工であつた。

⑦ 第二メガロンの爐は矩形にして一端は一・二四米のみ分明、第三メガロンには之を缺く。ミケーネの爐の構造——屢々塗り重ね新裝せし床より高きもの——については Wace,

B. S. A. XXV. 240 f.

⑧ 爐は元來は調理と暖を採る目的であるが (Schliemann, *Tiryns*)、これ等の爐にては調理の如き卑俗な用途は考へ難く (*Karo, Führer*. 27; *Tiryns*. P. W. 2 Reihe. 1463)。

⑨ トロヤのメガロンに就ては疑はしむ。

⑩ このことをミケーネのアトレウスの寶庫入口の隅柱より推測される。尤も Middleton (J. H. S. VII. 162) によれば後のギリシア式の如くに下太である。

⑪ なほメガロンでなく中庭の一隅であるが甚だクレタ的な復原圖は Wace, B. S. A. XXV. figs. 37-38.

⑫ 平屋根は霖雨或は砂漠に近い木材に乏しい地方に可能であること、またもしミケーネ的メガロンが然りとすれば、それはクレタの影響であるが、ギリシア時代に入つて再び切妻に復つたことの説明の困難などより切妻説が妥當なるが如くであるが、メガロンの爐の四柱は平屋根説を支持するが如くでもある。

⑬ 拙稿「ミケーネの「英雄崇拜」について」西洋史説苑第二輯。未刊なれど同第三輯所載の「エーゲ文明論」、世界史講座第六卷「エーゲ文明」參照。

⑭ 拙稿「ミケーネの「英雄崇拜」について」。

五 メガロンの性格と系譜

これまで私は各地、各時代において近接或は先在する文化の影響下にそれぞれのメガロンが成つたことを述べてきた。いまや此等メガロンよりしてメガロンとは何であるか、その一般の生成や系譜は如何に辿られるか、といふ本論稿の當初に掲げた課題に答へねばならない。既に幾分は答へられたが、より本質的に綜括的な解答を與へなければならぬ。

一體、我々はメガロンを如何に規定するか。家屋の原初形態はしばらく措いて、先づメガロンは矩形プランにして、二室以上であり、その室は前後に續くことは言ふ迄もないが、これらは基礎條件であつて、それよりメガロンと呼ぶにふさはしい必須特質については諸家が種々に答へてゐる。即ち或は居室の孤立化と室の中央に爐があること (Mackenzie, B. S. A. XIV)、或は中央の爐とポーチと小なる前室と大なる居室 (Fimmen, K. M. K. 46)、或はポーチ、小なる前室と大なる主室、孤立化、中央の爐 (Lamb, Therm. 49) 或は中央の爐と一端に二入口とポーチ (Boethius B. S. A. XXV) などは妥當な數

例である。此等は略々大同小異といふべく、(一)中央の爐、(二)ポーチ、(三)小なる前室と大なる主室の三點はメガロン成立の不可欠な條件である。中央の爐とはいふ迄もなく一であり、又メガロンにては一つに限ることとなり、次にポーチはそれに柱の有無にかかはらず、それによつて他の單なる矩形プランより區別するものであつて、例へ前室を缺いてもこれは必ず備へねばならない。尙ほ私は(四)として後述の如き諸家とは異なる意義に於ける孤立性を根本條件としたい。メガロンは他の建物と融合せず、塊狀建築とは決してならず、飽くまでも懸絶するものでなければならぬ。

此等の本質から我々がまた推論し得るものは次の二點にある。即ちメガロンは決して南方的ではなく北方的氣候の住居たること、及び權威性の要求の産物たることである。蓋し、爐もポーチも前室も、何れも第一義的には保温また暖を採ることを最大目的とするものであるからであり、また孤立は卓絶の要求に發するものであつて、それ故にメガロンの成長は權威者の勢力に比例し、また

部分的にも壯重化し定型化するからである。

メガロンが權威の具現たることは前節迄にも説いてきたところであるが、メガロンの北方性とは概して南方の氣候なるギリシア世界において如何に解釋されるべきか。

これは一考されねばならない。メガロンの生成完成諸地域の文化はクレタ文化との關係は甚だ薄く、或はありとしても副次的である。諸文物が證するところによれば、テッサリアの南方ギリシアとは異質文化を久しく持ち続け^②、トロヤ文化はクレタ文化と無縁であり^③、ミケーネ文化は全面的にクレタ文化を受容してゐるけれどもその主體においては飽くまでも非クレタ的であつた^④。

かくてメガロンはその本質においてもその生成圏においても非クレタ的即非南方的だといふことができる。グラスやフィラコピのメガロンの變形せる所以は兩要素の混合よりして初めて理解されることである。更にメガロン生成文化圏と北方——北歐、中歐、南露、ブルガリアなどの特定は別として^⑤——との關係は明白にして且つ深い。そして延いては此等諸文化は北方よりの侵入民と

聯關するものである^⑥。従つてメガロンはまた北方人種の産物とも斷じ得られるのである。かくてクレタ宮殿にみるメガロンの部分は全く異質のものである^⑦。

しかし此處に注意すべきは、この北方とはギリシアの國境の北の意味であつて、決してそれ以上に中歐また北歐人が既にメガロンを持ってりとの意ではない。それ故に國境の彼方、ハルシュタット^⑧(Meisner, "Haus" Real-Vorges. V.)、或は北獨の農家^⑨(Rider, Gr. House)或はスウェーデン^⑩(Boethius, B. S. A. XXV)或は更にアイスランド^⑪(Lang, Homer and History)、メガロンの原型を求めんとする努力は、ただに時間的の矛盾のためのみでなく、論理的推論以上に出でざる蓋然性に止るといふべきである。此等の論著の成果は、中歐また北歐はメガロン形式の萌芽をギリシアと共通する、更に類似近縁なる人種であることを證する一である。依つて共通する萌芽が何故にギリシアにおいてのみ開花結實したか、が問題として提出される。

さきに説いたメガロンの北方性とはその北方的な氣候

に適する住居であつたこと、及び北方民族と造形意志において共通すること、の二點にあつた。この内メガロンが生育せる地域は果して「北方的」といひ得るか。むしろそれはギリシア世界においての北方的風土にすぎずして、風土的にはマケドニア以南のギリシア世界は大なる共通性を持つてゐる。雨少くして乾燥せること、森林なきにあらざれど大農耕地なく、土の香り多きイタリアに對して石の多いこと、氣候は概して溫暖ではあるが、四季の別酷しく火氣を必要とすることである⁹⁾。大體において一月の平均溫度七・六——一〇・七度、七月は二六・八——二七・三度、年平均十七度臺、雨量四〇〇——七五〇耗といつたところである¹⁰⁾。

このやうな地域において建築が受ける制約は、材料上よりは、木造や煉瓦のみでなく、石造——石塊より切石へ——に移りゆく。乾燥せる空氣と比較的嚴しい冬の寒さは解放的な家屋より封鎖的な、冬を主なる考慮とする住居を建てしめる。メガロンの過度なる北方的風土への適性は——北方人本來の家屋形式は別としても——この

氣候によるものである。そして材料の上においては木材は棟木また骨組に使用されても、石塊、煉瓦、また切石が併用されて純木造建築を成立せしめず、簡明な外形外観を——之また民族性は別としても——生むに至るのである。

それ故にマッケンヅイが、メガロンはクレタ起源の原型より發し、氣候の故に南北、即ちクレタ式とギリシア式との別が生じたと言くものには(B. S. A. XIV)首肯し難いのである。彼が取上けるテッサリア、アルゴリス、キクラデス、クレタの諸建築を育てし各地の氣溫表は決してそれ程に根本的な差異を示さず、むしろ同一性を示すのであるからである¹¹⁾。依つてギリシアにおける南北兩系の建築様式は氣候に基づいて發生したとは到底考へ得ない。

ここに北方よりの侵入民が問題となる。しかし彼等は既に一定の家屋様式を持ちて侵入したとはいへない。彼等の生活の跡に残る家屋プランには原初的な、而かも數種があるのである。ここに一應これ等の原初形態より

してメガロンへの成長と完成を證せんとする實證的な努力がなされる。ギリシアには原初的な家屋として單室の種々のプランが存在するが、それは圓形、橢圓形、卵形、馬蹄形及び矩形——正面がより廣い Breitfront, Dreistufige 與行がより深い schmalstrinig, Schmalfront, Longhouse の二種——であるが、それらの内何れが一般的とも斷定し得ない。依つてその何れかを唯一の原型とし、或は數個の原型を認めて、それよりメガロンへの發展過程を推定せんと試みられる。然し唯一の原型のみを認容するのは極めて狭い地區においてのみ可能であつても^⑩或は餘りに論理的にして歴史性と地域性を無視したものであつて、歴史的妥當性に乏しい。殊にギリシア世界の如くに長期に互つて種々の種族が侵入せる場合において唯一つの固定せる家屋型式を求めるとは無理である。しかし結局以上の諸プランは圓形と矩形の兩種に大別され、此等は文化に固有のものでなく、異種文化内においても自生するものであり、ギリシアにおいては當初よりこの兩系プランが共存してゐたとみるべきである^⑪。然

らばこの單室の矩形プランより前後に室が續く複室となり、それがメガロンに成長するのではあるが、何故に矩形プランの家屋が、メガロンに成つたか、また如何にして粗雑なるメガロンが完成したか。この場合、テッサリア、トロヤ、ミケーネの諸メガロンはメガロン完成の過程を示すものでないことは、屢々述べたところである。ここに上述の諸プランよりメガロンの生成は、ギリシアの風土の制約とそこに先在或は近接する文化の影響受容との下において北方人が、即ち亞乃至原ギリシア人——嚴密には南方人との混血であり、彼等とても生成しつつある——が成せしものである。これ等北方人がギリシア人と成るに相應じてメガロンも成長してゐる。然らば我々は、メガロンの成育の中に、家屋としてメガロンが當面せる諸問題に對決する態度において、特殊な生成しつつある民族の性格を捕へることができらであらう。即ちメガロンにギリシア的北方精神の表現を見んとするのである。

メガロンがその生成の内において解決を要求されしも

のは、空間の擴張と權威性の表示とであると思ふ。前者

は保溫を旨とし乍ら狭き家屋を如何に擴大するかであり、後者は權力を誇示する中に自ら建築美を發揮することである。空間の擴張は附屬室を建て加へ或は凡ての部分を同比例のままに大規模に擴大することによつても達成される。しかし明晰と封鎖性とがそれを許さなかつたし、また技術上の制約や自然との對應が、埃及の如くに巨大なる簡明さをも許さなかつた。一面からいへばメガロンにおいてその定型化は餘りに強くして塊狀建築となるを認めず、精とトロヤの如くに繰返すにすぎない。またグラの如くに他の要素を加へても異質的な結合を出でない。この封鎖性は更にティリンスやミケーネの如くに前庭をも含んで一つの隔絶せる小世界を形成する。この故にメガロンの根本構造には發展性が乏しく、簡明なる構造を變更すべからざるものとして保有する原始性があるが、同時に原理性でもあるといへよう。明晰は附加を好まず、簡明な構造の仕上げにのみ努力するからである。故に保溫についても中央の爐以上に出でないのであ

つた。

次に、メガロンの作者達はその簡素の中にてその記念碑的建築としての權威性をみたのであるが、それはティリンスやミケーネの如くに全城塞中にあつて唯一のメガロン以外には類似の建物をさへ認めざるに至る。それは權威の象徴であり抽象となる。公的生活中にて最も公的なる生活の行はれる場所として、原初は實用生活の住居より出生し乍ら、それより抽象化され昇華されたものといへよう。これが私のいふ卓絶性である。故にその前庭も爐もポーチも前室も初期の意義より轉じて或は變形され或は轉用されたのである。

そしてこの際、メガロンは常にその正面においてのみ眺めらるべきものであつたし、ミケーネやティリンスにおいては他の面よりは眺むべくもなかつた。それ故にその正面の外観には作者の美意識が最も強く働いてゐた。細部の裝飾はとはせず、そのポーチの柱が問題となる。ノックによれば正面が二分されるか——即ち一本の柱、また奇數の柱——三分されるか——即ち二本また偶數の

柱——はクレタ式乃至南方系建築とギリシア的乃至北方系建築とを別つ特性の二であるが (Noack, *Hom. Palast*, 33 f.), このことには構造上の理由ありとしても、次の如き深きギリシア的な感覺に基くものとして私は解釋するのである。ノアックの説に對して成程マッケンヅィの駁論は成立するかも知れないが (B. S. A. XI, 207 f.), それは表面上の認容であつて、同じ三分にしても決して同一性質のものではない。マッケンヅィもいふ如くにクレタにおける二本の柱の使用は主に明層においてであつて側壁と柱、柱と柱との距離は相等しいのが常であるが、ギリシア本土のメガロンにては柱の使用は、その入口、メガロンの最も外觀される正面であり、而かも柱間距離は決して相等しくない。既にディミニAにては側壁と柱の距離は兩柱間の距離より狭いが、テイリンス、ミケーネにおいては中央の柱間距離が廣く——約二・四米に對し二・九米、約一・六米に對し、一・九米——充分に意識されし結果である。この心はトロヤにて中央に大なるメガロンAを建てその兩側に同型の小メガロンを並べ建

てたものである。クレタ宮殿にみる二分されし入口にあつては柱に意義があるに對し^⑥、此處では空間に、また左右の對照する空間との關係が意識されてある。かくて比例の作りなす美は既に充分にメガロンにみられるのである。

以上既にメガロンは封鎖性、明晰、抽象性對照の美が支配してゐた。そして此等は種々の條件によつてそれ々の文化圏に異なるメガロンを生み乍らも共通する基本精神として働いてゐた。

然らば各文化圏メガロンの相互關係は如何に考へてよいか。それは各文化圏の相互關係によつて決定さるべきであるが、唯ミケーネのメガロンのみは特殊な意義を持つてゐる。即ちそれによつてメガロンが全ギリシア世界のものとなり、更に後のギリシア建築に傳はるからである。そしてその完備はクレタ建築の受容によつて成り、また人にして神に近きに迄至れる王、即ち「英雄」達^⑦の權勢によつて果し得たのである。かくてエーゲ文明の產物としてのメガロンはこの文明の諸要素を包括せる點に

において、またかかる記念碑的建築を創造し得る能力と權力とにおいて限界に達したのである。

註① ヴッケンシュイ(B. S. A. XIV. 350.)によれば、居室の孤立化は暖気の發消を避けるがためであつて、煙出の必要よりクレタ建築の如くに數階建は許されなかつたと。これにも一理あるが、私のいふ孤立化とは建築全體の卓絶化である。

② テッサリアは独自の年代期としてテッサリア第一、第二、三、四期を有するが、更に或は南方ギリシアの住民とは人種的乃至その混合度におつても相異あつたと(Wace-Thompson, Pr. Th.)。

③ Bittel, *ibid.* 100. また Götzke (Kultur. d. Kl. 32.)

Frankfort (Studies of Early Pottery in N. E.)によれば陶器上の關聯をつけるが、年代上私は採らない、またそれ以上のものではない。

④ イーヴァンスやヴッケンシュイはクレタ人とするが、大勢はそれを認め得ない。拙稿「ユーゲ文明論」参照。

⑤ テッサリアと北方との關係については Wace-Thompson, *ibid.* Chap. VI^o ムロヤノのミツトは拙稿 Cletoon-Thallon, Bittel 等。

⑥ Kraiker, Nord. Einwand. Gr. Antike XV. 3; Hopkins, Early His. of Greece. Yale Cl. St. 2; Meyers, Who

were The Greeks?

⑦ Noack, Hom. Paläste 参照。また Dörfeld はクレタ宮殿に前期のカリア式と後期のメカイア式メガロンを認めんとするが (Atte. Mitt. XXX) ヴッケンシュイの駁論(B. S. A. XI.) は正しい。

⑧ J. Ponten, Gr. Landschaften; Hogarth, The Nearer East. Chap VIII. IX. またノーマーミット(俄譯「岩波文庫版」)「人文地理學原理」下巻(一八頁)には地中海地域におつて石材建築の最も發達せるをみてゐる。

⑨ Maul, Gr. Mittelmeergebiet 21 ff.; Philippson, Das Mittelmeergebiet 20 等の數字は北部ユーゲ世界を除く、小アジア西岸エラントクレス島を含む地域に共通であるが、私はギリシア的乃至古典的景觀世界とした。

⑩ 我々は今日古代遺蹟地における氣温表などを持つことができないが、幸にもそれらの地に近接する都市については知ることが出来る。即ち

	一月	七月	年平均	最高	最低
Yollo (Sasklo. Dimini 附近)	7.4	26.0	16.8	18.6	4.8
Nauplion (Myce. Tiryns 附近)	10.0	26.7	18.0	16.7	4.37
Syros (Melos 島附近)	11.7	26.7	18.7	15.0	4.94
Kanea (Kreta 北岸)	10.8	25.7	17.9	14.9	6.17

(Maul, *ibid.* 25 に據る)

⑪ 例へばオリスモンには圓形、橢圓形、矩形プラン家

がその第一、二、三期に相應して層序的に先後を示し、(Baile, *Orchomenos*, I, 36 f.)、オリンポスにては最古の層には楕圓形、テイルリンスにては最下層には圓形の大家屋址があつた。是等のことよりまた論理的な推論より凡ての家は圓形或はその類型より出發すると説くに至る。例へば Baile, *ibid.*, Frechter, *Haus*, P. W. XII, Anderson-Spier-Dinsmoor, *Arch. An. Gr.* 其他。フックンツィはクレンタの正面の廣し單室家屋より but and bar 型に、それよりメガロンへの發展を説く。或は圓形プランは北方系にして、矩形は南方系なりと (Schuchardt, *Altencrupa*; Anderson-Spier-Dinsmoor など)。

② Pfuhi, *Vorgr. u. gr. Haustypen*, 18 f. Finnem, K. M.

K. 46; Rider, *Gr. House*; # 4 Boehius *ibid.* Wace-Thompson, 220 (ナマサルに就くこと)。

③ 柱の崇拜はクレンタ文化の特長であり、これとの關聯も考へ得られる。

④ 拙稿「ミケーネの英雄崇拜について」西洋史説苑、第二期。

六 メガロンとギリシア

前節に説いた如くに、メガロンの生成はギリシア民族の生成に伴ふものであり、またメガロンが自己に課せら

れた課題に對處する態度はギリシア的に外ならない以上私にはメガロンとギリシアとの關係は既に充分に明かに豫定されてゐるといへるであらう。然し事實それ故にこそエーゲ文明の破壊者たるドリア人、或はドリア人侵入後のギリシア世界は、他の文物においては一應は別なものを創造したにかかはらず、建築においては素直にメガロンを採用し、彼等の最も重要な建築物即ち神殿を作り得たのである。このやうなミケーネ宮殿建築よりギリシア神殿建築への推移過程は證據を以て示すことはできないが、Lehmann-Hartleben の假説 (Wesen u. Gestaltung gr. Heiligtümer. *Antike* VII 1 u. 2) 最も妥當なるものと思はれる。神に近き權力者の住居を懸絶するが人界に近い神の住居にあて、やがてその様式を以て神殿様式と定めたのである。

しかしエーゲ文明の産物たるメガロンがそのままにギリシア精神の産物となつたのではなく、何等かの變容によつて轉用乃至轉化されねばならなかつた。このことは如何なる變更によつて成し遂げられたか。それは柱を以

てメガロンを繞らすことにより可能にされたのである。

このことによつてメガロンはギリシア神殿の核室たる内陣(セラ)を形成するが、繞柱されたメガロンはエーゲ的なメガロンとは別な外觀を呈する異なる表現體となつた。

繞柱式の出現は極めて古く、ここに繞柱が如何に早期よりギリシア建築またその藝術意慾に不可欠なりしかが知られる。

然らば一體繞柱は如何なる意義を建築に賦與し、またそれによつてメガロン建築が如何にギリシア建築に變質轉用され得たか。先づ柱を繞らすことによつてメガロンが形成せる封鎖完結世界は打破されて、神殿は正面のみよりではなく、四周よりも眺められることができるものとなり、プロピライオンは正面にあらずして、後方斜に設けられる。依て人々は神殿をば斜後面より、また側面を眺めつつ正面に至る。尤も神域全體は圍壁にて圍れてゐるが、神殿そのものは柱廊をなす繞柱によつて開放されてある。このことは俗界の絶大なる城主とギリシア神との性格の差に基くものである^①。

次に柱によつて開放性を與へられし神殿は、しかしそのメガロン式の核室は依然として封鎖的であつて、ここに神殿は封鎖と開放、明と暗とのコントラストの渾成體となり、また繞柱によつて固定と靜的なメガロンには動的と律動とが、與へられる。そして更に多くの柱の、また多様な使用法によつて神殿建築は多様な形態を生むことができ、ここにギリシア藝術精神の活動領域が拓かれたのであつた。かくの如き繞柱の意義を解してこそ、ギリシア神殿は「柱の建築」なりとの意義が眞に理解されるといふべきであらう。繞柱こそギリシア藝術としての神殿を成立せしめたのである。しかしその内陣は依然としてエーゲ時代のままのメガロンであり、その興行と正面の比、高さと幅との釣合は保持されたのであつたことにおいて、他の構造や細部は問はずとも、メガロンはエーゲ文明中より成育しつつあつたギリシア精神の表現であり、更に眞のギリシア建築の精髓の要素を形成することができたのである。ギリシア建築程に簡素な原始的な構造はないといはれるが^②、それはまたギリシア人が構

造性そのものに意義を認めただからであり、それはまた既にメガロンにて顯現され、而かもギリシア的に顯現されたが故に、メガロンはエーゲ時代よりギリシア時代に生

き續けることができたのであつた。

註① 拙著「希臘美の性格」一四〇頁以下。

② Hege-Rodenwald, Akropolis.

北齊律令刪定考

内田吟風

緒言

- 一 東魏の律令と麟趾格
- 二 麟趾格の改正と後魏律令の襲用
- 三 別條權格及び河清律令の班下
- 四 律の篇目とその刑制及び權令

緒言

東亞諸國諸朝の律令の母法たる隋唐律令が、其實後魏

北齊の其れに依循せるものであることは、既に現在東亞法制史學上の定説となつてゐるところであり、従つて又唐律令に準據して編纂せられたる我國律令の研究をなすに當つても、是等北朝系律令の究明が極めて必要であるといふことも既に多くの人々によつて唱へられてゐるところである。

然るに拘らず、從來これら北朝系律令乃至諸法制に就